Economic Monday
エコノミック・マンデー

10月号は「かっちゃの経済」

農山漁村の女性の働き

伝統からイノベーション

知恵絞り新商品生み出す

弘大人文社会科学部・杉山祐子教授

【エコノミック・マンデーB面から続く】

日本の社会・文化を維持する上で重要だった農山漁村の女性の働き。お金には換算されてこなかったが、産直施設の普及などによって、女性は継承した食文化のノウハウを換金する手段を得ることができた。

女性たちは自分の財布を持つと、グループで旅行に行くとか、農機を買うとか、キッチンをリフォームするとか、自由にお金を使えるようになった。国や地方自治体など政策の側でも、農山漁村の衰退を食い止めるため積極的に女性の力を活用しようとした。

自分たちで工夫を重ねるとどんどん商品が売れることにも気付き、のめり込んでいったのではないか。漬物は東北を代表する伝統の食文化だが、「減塩漬物」など次々とイノベーションが起きた。伝統を守っているようでありながら、実は時代が求める新たな商品を生み出している。

生産者だけでなく、産直施設で働いている人たちも知恵を絞っている。「どうやったらお客さんが来るか」「どういう商品が売れるか」「どう稼ぐか」と。産直施設は地域の食文化を見直す場となっている。

私のように消費しかしない県外出身の人間も、その地域の自然や農業の特性と結び付いた食生活を送ることができるので、知らず知らずに食文化を受け継いでいるのではないか。

（少し話を変えて）私がフィールドとするアフリカのザンビアという国を見ると、日本の「かっちゃ」と同じように女性は実にたくましく生きている。

かつては男女が役割分担して一緒に焼き畑農業をしていたが、1980年代に政府が男性にトウモロコシなどの換金作物を作らせる政策を取った。すると、お金を稼ぐことだけが仕事と思われるようになった。お金を手にした男性の家庭内での発言力が高まり、女性と力の差が広がった。

ところが女性は負けていない。どこからか新しいお酒の醸造法を仕入れてきてみんなで共有し、お金を持っている男性に売るようになった。女性もどんどんお金を稼げるようになり、90年代には家庭内での力関係は元に戻った。

男女間でお金と力のバランスが崩れた時、女性は加工の技術や知識、助け合いの仕組みを応用して、バランスを元に戻したわけだ。アフリカの場合は短期間で起こった変化だが、日本の農山漁村と似たところがあって面白い。

（聞き手・今井崇雄）

女性の食ビジネスなどについて語る杉山祐子教授　＝弘前大

略歴　すぎやま・ゆうこ　筑波大歴史・人類学研究科修了。アフリカでは焼き畑農耕民の生活様式の変化を女性の視点から長年観測。青森県内では過疎や出稼ぎ、産直施設などを研究している。東京都出身、57歳。